



Title	ヘンリー・ジェイムズの観相学：『アメリカ人』の顔を読む
Author(s)	高橋, 信隆
Citation	Osaka Literary Review. 2006, 45, p. 101-114
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25304">https://doi.org/10.18910/25304</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ヘンリー・ジェイムズの観相学 —『アメリカ人』の顔を読む—

高橋 信隆

## 序論

ヘンリー・ジェイムズの小説『アメリカ人』(1877)は、登場人物の顔を詳細に描く。顔の特徴に注目することによって、その人物の性格や職業や運命などを読み取る術、すなわち、観相学への関心を抑えることができないと言わんばかりに、語り手は、次のように意見を物語の中に介入させる—「[クリストファー・] ニューマンが観相学者 (physiognomist) ではなかったことは残念だ。というのも、パリの人々の顔の大半は、不ぞろいに愛想がよく、表情豊かで、示唆に富んでいたからである」(188)。また、ジェイムズ自身と思われる語り手、「私」は、「ニューマンがトリスマの顔についてどのように思ったのかは分からぬ」(26) という私見を告白する。

興味深いことに、ジェイムズ自身、この小説を執筆する数年前から性格を表わすものとしての顔にこだわり始めていた。彼は、心理学者の兄、ウィリアム・ジェイムズに宛てて書かれた手紙の中で、「人々の顔つき (physiognomy) や風習に対する私のわびしい気持ち」(*The Correspondence of William James* 240) と記しているし、母親への手紙の中で「私たちアメリカ人の声や話し方、そして顔つき (physiognomy) の不幸なる貧弱さ」(October 13, 1869) を嘆いてもいる。そして、1875年には、兄ウィリアムが、医学者ニコラス・モーガンの『頭蓋骨と脳』という研究書の書評の中で、「頭部の解釈は、かなりしっかりとした、そして有益な学問に結びつくであろう」(William James 308) と記し、人間の顔の研究に興味を示した。ヘンリー・ジェイムズは、ウィリアムと頻繁に文通していたのであるから、ウィリアムのこの書

評を読んでいた可能性は高いと言えるだろう。そのうえ、1870年から1875年の間に、ヘンリー・ジェイムズは、観相学の創始者ジョン・キャスパー・ラヴァーター（1741-1801）の観相学理論に影響を受けた（Walters 182）彫刻家ウィリアム・ウェットモア・ストーリー（1819-95）のアトリエを度々訪問していたのであり、この彫刻家の著書『人体の比率—実用的な使用のための新しい規準に応じて』（1866）をも愛読していた—"My [James's] discrimination attaches better to his [Story's] Study of 'The Proportions of the Human Figure' . . ." (*William Wetmore Story and His Friends* 322)。ジェイムズは、ストーリーを通して、観相学の知識を獲得していたにちがいない。

ラヴァーターの観相学の影響力は、19世紀に入ってからも衰えることはなかった。アメリカやヨーロッパ諸国（特にフランスとイギリス）<sup>1</sup>では、ラヴァーターの著作の翻訳書が何度も版を重ね、彼の観相学を参考にして、雇用者が使用人の採用を考えることもあったらしい（谷内田 62）。ジェイムズは、『アメリカ人』を執筆していた当時、パリに滞在していたが、フランス語が堪能であった彼は、ラヴァーターのフランス語訳を読むことができたであろう。また、ジェイムズが愛読していたオノレ・ド・バルザック<sup>2</sup>は、『絶対の探求』（1834）という小説を書いたが、この小説の中に、私たちは、ラヴァーターへの言及を見つけることができる—"Lavater would certainly have studied the noble head, . . ." (Balzac 21)。上述のことから、ジェイムズが観相学から知識を吸収することができる機会に恵まれていたと言うことができる。

ジェイムズの小説『アメリカ人』は、人相を問題にしている作品である。なぜ、ジェイムズのこの小説は、人相にこだわっているのであろうか。この小説の先行研究としては、マーク・セルツァーが、社会的事象の外見と内実、表と裏とを完全に対応させたいという強迫観念に取り付かれたニューマンに着目し（Seltzer 148-49）、社会観相学の立場から議論を構築している。しかし、本論では、19世紀後半に観相学に熱中した医学者・人類学者の思想の

コンテクストとの関係において、先の問い合わせについての考察を深めていきたい。

## I. ニューマンの顔を読む

革製品の事業によって莫大な富を築いた、アメリカ人実業家ニューマンがパリのルーヴル美術館にいる場面から、この小説は始まる。気温が高いのと歩き回っていたので、彼は、ハンカチで汗を拭うが、「筋骨たくましい」(17) 体格の彼は、「疲れを知らない」(17) とか「活力」(17) とか「丈夫」(17) などと形容される。絵画作品よりもむしろ、フランス人の若い女性たちが模写している絵を眺めているときの彼の顔は、まず、「彼が抜け目がない、有能な人間であったということを充分に示していたことであろう」(17) という様に紹介される。これは、ニューマンの顔という外見から推測された、印象に基づく描写であるが、語り手は、このように観察されたニューマンの内面—生活状態—をも次のように抉り出す—「実際、彼は高く積み重なっている計算書の束を見ながら、一晩中、起きることがよくあった。そして、あくびもせずに、鶏が鳴くのを聞いていたのだ」(17)。徹夜で計算書の処理に取り組む、エネルギーッシュなビジネスマンとしてのニューマンの様子を、語り手は、ニューマンの顔から読み取っているのである。

この小説の語り手は、さらに、読者の注意をニューマンの目に向けさせようとしている。

It was our friend's [Newman's] eye that chiefly told his story; an eye in which innocence and experience were singularly blended. . . . Frigid and yet friendly, frank yet cautious, shrewd yet credulous, positive yet skeptical, confident yet shy, extremely intelligent and extremely good-humoured, there was something vaguely defiant in its concessions, and something profoundly reassuring in its reserve. (18-19)

このように解説を迫られたニューマンの目は、彼の性格を物語る。目から読

み取ることができる情報としての彼の性格は、単純（＝無垢）と抜け目のなさ（＝経験）とに大別される。リー・クラーク・ミッチャエルは、この小説全体にわたって、二項対立の構造が見られると指摘したが（Mitchell 1-16）、本論では、ニューマンの目の描写から読み取ることができる彼の気質についての二項対立に触れてみよう。たしかに、ニューマンは、フランス上流社交界の慣習に無知であり、ヨーロッパ美術への造詣も浅い、「未発達な目利き」（18）であるという点で、無垢な人物ではある。しかし、彼の性格形成に貢献してきたものは何なのかを考えるときに、実業家としての彼の経験を踏まえておく必要がある。というのも、彼は、人生の大半をビジネスの世界で過ごしてきたからである。ニューヨークのウォール街で株取引に携わっていた彼は、お金を稼ぐことだけが人生の目的であった。そのような功利主義的な生き方から脱却したい衝動に駆り立てられて、彼は、パリを訪れた。しかし、パリにおいても、ビジネスの世界の中で染み付いた功利主義的な思想から、彼は脱却することができていない。彼は、名門貴族の娘クレール・ド・サントレと結婚したいと思うのだが、結婚の許可を得るために彼女の母親に対して自分の財産の額をほのめかす。また、彼女の母親ベルガルド夫人は過去に夫を殺害したことがあるのだが、その犯罪を知ったニューマンは、ベルガルド夫人を脅迫する。破談にされたクレールとの婚約を修復するために。

このようなニューマンの「抜け目のない」（"shrewd"）、打算的な振る舞についての描写は、観相学からの影響を受けている。この小説の冒頭の部分で、彼の頭部は、"He [Newman] had a very well-formed head, with a shapely, symmetrical balance of the frontal and the occipital development"（18）として描かれている。C. H. バロウズは、『骨相学的描写』（1870）の中で、前頭部には、計算能力が存在していると記した（qtd. in Walters 185）。フランスの医学者、G. B. デュシェヌ・ド・ブローニュは、電気刺激によって、額に注意力と内省の存在を確認した（Duchenne 45）。アメリカの観相学者、ネルソン・サイザーと H. S. ドレイトンも、前頭部には理性と認知力が内在して

いると確信していた (Sizer and Drayton 54)。ニューマンは、実業家として、「統計学を好み」、「どのような税金が支払われたのか、どのような利益があつたのか、それにどのような商業の考えが普及しているのかを知る」(55) ことによって、満足感を得ていた。彼の頭部に見られる前頭部の発達は、ビジネスの世界に彼が長年、属していたためかもしれない。19世紀の観相学では、社会環境が人間の顔や身体に何らかの刻印を与える、と考えられてもいたからだ (Tytler 232)。19世紀の名高い司法写真家アルフォンス・ベルティヨンも、「職業は必ず手になんらかのスティグマを残す」(多木 218) と考え、「職業という社会性を、生理学的な視覚的特徴に結びつけるカタログをつくること」(多木 218) を重視した。チャールズ・ダーウィンも、「日々従事している職業によって、身体の様々な部分の比率が変わってくる」(*The Descent of Man, Selection in Relation to Sex* 18) と考えていた。計算と利益の獲得、これがニューマンの「実際家」(55) としての根元的な要素である。頭蓋骨を読み解く学問は、「人間の社会における位置を説明するための合理主義的な方法」(Wrobel 124) と見なされるようになっていた。

## II. 悪党の顔

ここで、犯罪者の顔の分類に取り組んでいた、19世紀後半の医学者・人類学者の言説を見ておくことにしよう。イギリスのハヴェロック・エリスは、『犯罪者』(1892) の中の「刑事観相学」と題された章の中で、「美しい顔は、犯罪者たちのなかには滅多に見つからなかった」(Ellis 80) と記し、「陰陥な、残忍な目配せ」(Ellis 82) や「上顎の突出」(Ellis 79) などを、犯罪者の顔の特徴として指摘している。イギリスのフランシス・ゴルトンは、凶悪な犯罪者の写真を集め、彼らの顔に共通する特徴について、「未開人のような顔」("Generic Images" 162) という類型を導き出した。様々な顔の特徴を集めて、一つの特徴を抽出することを、観相学は、目的としている (Hartley 37)。イタリアのチェーザレ・ロンブローゾは、「あまりにも大きすぎる上顎骨」

や「大きくて突起した頬骨」や「鼻の骨の異様な形」(*Crime: Its Causes and Remedies* 371) などが、犯罪者の顔の特徴であると判断し、そのような異貌は、「生肉を引き裂き、むさぼり食う肉食動物や野蛮人に共通のものである」(*Criminal Man* 7) と指摘した。

しかし、夫を殺害したベルガルド夫人と、彼女の犯罪を黙認してきたユルバン－クレールの兄一の顔は、犯罪人類学者・医学者たちが割り出したそのような犯罪者の異貌<sup>3</sup>とは違って、端正である。ベルガルド夫人の顔は、

He [Newman] received a rapid impression of a white, delicate, aged face, with a high forehead, a small mouth, and a pair of cold blue eyes which had kept much of the freshness of youth. (119)

と描写されている。ニューマンの印象によれば、クレールの「額と鼻の高貴な端麗さ」(120) は、ベルガルド夫人からの「遺伝による」(120) ものである。ニューマンがベルガルド夫人に対して抱いた、このような印象に関する限り、彼女は優美で、上品な老貴婦人である。ロンブローヴとウィリアム・フェレーロの『女性犯罪者』(1895) によれば、女性犯罪者の容貌の特徴は、「顔の不均齊に加えて」、「狂気じみた目」(*The Female Offender* 100) であると定義されているが、ロンブローヴのそのような定義は、ベルガルド夫人の容貌には当てはまらない。では、他方、ユルバンの顔は、どのように見られているのか。

With his long lean face, his high-bridged nose, and his small opaque eyes, he [Urbain] looked much like an Englishman. His whiskers were fair and glossy, and he had a large dimple, of unmistakable British origin, in the middle of his handsome chin. (123)

ユルバンもまた、犯罪者の容貌とは程遠い顔つきであり、ニューマンの目に もユルバンは、ここでは、イギリス紳士のようにしか見えない。形の良くな

い「顎」については、観相学の鼻祖ラヴァーターが、"A long, broad, thick chin—I [Lavater] speak of the bony chin—is only found in rude, harsh, proud, and violent persons" (Lavater 477) と考えていた。ラヴァーターのこの見解に照らしてみても、ユルバンの顔は、悪徳を隠すための優れた仮面である。

私たちが確認したベルガルド親子の顔つきは、犯罪者としての過去を他者の視線から覆い隠すためのカムフラージュなのだ。ニューマンは、ベルガルド夫人の顔を見ているときに、「彼女の実態をつかむことが容易ではないと感じた」(120) ことがあるのであるから。

ジェイムズ作品において描かれる悪意のある人物の顔は、悪人の類型を顔の特徴から明らかにした医学者・人類学者の観相学理論を覆す顔である。先に引用した医学者・人類学者による悪人の顔の定義から、私たちは、悪人の顔の共通項が醜さであるということを確認した。しかし、ジェイムズ作品における悪意のある人物の顔は、美しい。『ある婦人の肖像』(1881) に登場する、妻イザベルを精神的に抑圧するギルバート・オズモンドの「優しく魅力のある髪の毛」、そして「粗野にならずにふっくらとした、色つやの良い顔色」(*The Portrait of a Lady* 224) は、彼女を魅了していた。『鳩の翼』(1902)においては、不治の病に冒された、富豪のアメリカ人女性ミリー・シールの遺産をだまし取ろうと画策する悪女ケイト・クロイの顔もまた、悪人にふさわしくない、美しい顔であり、ケイトの顔は次のように描写される—「彼女は美しかったが、その美しさの程度は、装飾品によって維持されてはいなかつた」(*The Wings of the Dove* 22) と。つまり、ケイトの顔は、「装飾品」の助けを必要としないほどに純然たる美しさなのである。『ねじの回転』(1898)において、悪の権化と見なされる幽霊—ピーター・クイントとジェスルーの容貌もまた端正だ。クイントの幽霊は、「俳優のように見える感覚」(*The Turn of the Screw* 24) を、その目撃者である家庭教師に抱かせるのであり、ジェスルーの幽霊の顔は、「非常に美しい」とか「とても、とても美しい」とか「驚くほど美しい」(*The Turn of the Screw* 32) などと形容される。

### III. 素人「観相学者」としてのニューマン

前述のように、ニューマンは、犯罪者—ベルガルド夫人とユルバンーの顔を読むことはできないが、一般人の顔を読み解くことはできる。クレールとの結婚相手として浮上してきた、ある貴族の顔がニューマンの目には、「非常に愚直で、ある程度の野蛮さと、過去にすばらしい教育の利点を得ていそうになかったことを意味していた (denoted)」(161) ように見える。しかし、ニューマンの観相学は、ヴァランタンの顔を見ているときには、より複雑で高次のレヴェルにまで高められる。ニューマンは、ヴァランタンの顔を見ているときに、異人種間の関係を意識してしまう—" [T]here was something in his [Valentin's] physiognomy which seemed to cast a sort of aerial bridge over the impassable gulf produced by difference of race." (89)。この引用文において、注目しておきたいのは、ニューマンがヴァランタンの顔を、異なる人種を交流させてくれるための「架け橋」に例えていることである。ニューマンが抱いた、この印象は、彼が初めてヴァランタンに会ったときの印象であるから、ニューマンは、直感的にヴァランタンとの縁の強さを感じ取っていたことになる。

異人種の顔のうちに、祖国的な要素を読み取ることは、ニューマンの観相学的な才能であると言うことができるかもしれないが、彼のそのような能力は、結婚相手としてのクレールの顔を見るときにも発揮されている。母親譲りの美しさに恵まれたクレールの顔を見たときに、彼は、突然、ノスタルジーに襲われる—

Madame de Cintré's face had, to Newman's eye, a range of expression as delightfully vast as the wind-streaked, cloud-flecked distance on a Western prairie. (120)

ニューマンの意識の中では、クレールは、大草原の風景として立ち現れている。アメリカの風景を思い起こさせる、クレールの優しい表情が、彼にそ

のような幻想を抱かせたように思われる。リチャード・ポワリエは、この描写によって、「クレールが一種のアメリカ人である」(Poirier 65) ことが意味されていると主張するけれども、ニューマンがこのように人間の顔と自然風景との間に相同関係を見出していることは、19世紀後半のアメリカにおける骨相学の流行と無関係ではないようと思われる。その当時のアメリカでは、優れた歴史的人物の頭蓋骨を分析する骨相学<sup>4</sup>がナショナリズムを台頭させる引き金となっていた。そのような社会状況の中で、自然風景を人間の顔に見立てるという思想までもが広まっていった (Tichi 23-40)。ニューマンがクレールの顔から読み取った、大自然のイメージの中にも、観相学的発想が刷り込まれているのである。

顔や身体から、ニューマンは、その人物の運命をも、無意識のうちに読み取ってしまう。ヴァランタンの顔と身体を見るニューマンの視線を追ってみよう。

He [Valentin] had... a moustache as delicate as that of a page in a romance. He resembled his sister not in feature, but in the expression of his clear bright eye, completely void of introspection, and in the way he smiled. The great point in his face was that it was intensely alive—frankly, ardently, gallantly alive. The look of it was like a bell, of which the handle might have been in the young man's soul: at a touch of the handle it rang with a loud silver sound. There was something in his quick, light brown eye which assured you that he was not economizing his consciousness. (90)

ヴァランタンの「口髭」は、彼の運命を物語る、一種のテクストである。彼は、ノエミをめぐって、恋敵との決闘に臨み、その恋敵の銃弾に倒れるという、「ロマンス小説」のプロットを実践するような死に方をすることになるからである。そのようなヴァランタンの「ロマンス小説」としての「口髭」

とは逆に、ニューマンの "moustache"（「口髭」、19）は、「でしゃばりな役割を果たしていたのかもしれない」（19）髭、つまり、「でしゃばり」という、たたき上げの実業家の欠点を示す記号である。顔の一部分は、顔全体の特徴を示す。つまり、顔の一部から、その人物の性格を割り出すことができるという理論は、「観相学の第一原理」と呼ばれた（"The First Principle of Physiognomy" [571-72]）。それに、ニューマンの目は、「決してロマンスの主人公の輝く目ではなかった」（18）のであるから、彼は、観相学的に、「ロマンス」の世界から絞め出されているのである。ヴァランタンとニューマンとの出会いは、顔という媒体を介して、ロマンスとビジネスという異なるジャンルの対置を浮かび上がらせているのである。ニューマンは、ヴァランタンの顔を「鐘」に例えているが、この「鐘」という比喩表現もまた、ヴァランタンの性質を巧みに捉えた表現である。「鐘」の取っ手に触れる、言い換えれば、ヴァランタンの感情を少しでも刺激するならば、彼は、すぐに激情に駆り立てられるであろうという推測を、ニューマンは抱いているのである。ニューマンの目には、ヴァランタンの頭が「丸い頭」（89）であるように見えていたのであり、ヴァランタンの表情が元気に満ち溢れていたために、ニューマンは、咄嗟に、「鐘」の比喩を思いついたのであるだろう。ニューマンがヴァランタンの顔を見ることによって思いついた、この「鐘」は、このときのニューマンにとっては、ヴァランタンの若さと生気とを告げてくれる「鐘」であるはずである。しかし、この「鐘」は、決闘で倒れて死ぬヴァランタンの葬儀のときに鳴り響く「鐘」としても解釈できる。というのも、激しい情熱に駆り立てられるような人物であったからこそ、ヴァランタンは、生か死かのどちらかを選択しなければならない決闘に臨んだのであるから。

人物の顔を観察する素人「観相学者」としてのニューマンもまた、観察の視線から逃れることはできない。この物語の語り手は、ニューマンの身体に注目する。執拗に、語り手は、ニューマンのがっしりとした身体に注目する。ニューマンが歩く姿は、「肉体の偉大な芸当」（17）と表現されている。また、

彼が背筋を伸ばした姿は、「行進する精銳部隊の歩兵」(18) のように見えるという。彼の首も、「筋骨たくましい首」(18) なのだ。「民族の類型」(17) を探求する語り手にとっては、ニューマンは、肉体的に「力強いアメリカ人の標本」(18) 一観相学の理論モデルーに過ぎないので。

## 結 論

『アメリカ人』という小説の中には、見る者としてのニューマンと見られる者としてのニューマンとが共存している。

まず、見られる者としてのニューマンを振り返っておこう。ニューマンの顔は、エネルギッシュなビジネスマンとしての生活状態を示す記号であったし、彼の前頭部もまた、ビジネスマンとしてのニューマンの計算高い性格と対応するかのように発達していた。彼の顔や頭部だけではなくて肉体もまた、厳しい経済競争の中で勝ち残っていく企業戦士にふさわしい、たくましい身体であり、頑丈な身体は優れたビジネスの才能を意味するという理屈が、ニューマンの顔や身体の観察を通して、成立させられている。もっとも、口髭は、彼のでしゃばりを意味する負の記号ではあったが。

他方、見る者としてのニューマンの場合には、私たちは、他者の顔から内面を読み取ろうと試みる素人「観相学者」としてのニューマン像を浮かび上がらせた。

このように観相学の理論を体現すると同時に実行に移しているニューマンは、ベルガルド親子の顔から彼らを犯罪者として認識できない。容貌と精神とが一致しないタイプの犯罪者に対しては、容貌と精神とを対応させるニューマンの観相学は、あるいは、容貌と精神とが対応させられているニューマンの描写に代表されるような観相学の理論は有効性を喪失するのだ。ベルガルド親子は、人間だけではなく、観相学の理論をも殺害しているのである。ジェイムズは、このように観相学的モチーフを利用することによって、観相学の矛盾点をアイロニカルに暴き立てているのである。

付記：本論は、日本英文学会第75回全国大会（2003年5月24日、会場：成蹊大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

### Notes

1. 富山太佳夫氏もまた、次のようにラヴァーターの影響力を確信している—「古来の日常的な知恵としての観相術的な顔のとらえ方が、ラファーター[ラヴァーター]の名前を伴って、ヴィクトリア時代のイギリスの風土に流通していたことは間違いないのである」（富山 223）
2. 興味深いことに、スタンレー・レナーは、ジェイムズがヨーロッパの著名な小説家たち—チャールズ・ディケンズ、ヘンリー・フィールディング、ブロンテ姉妹、オノレ・ド・バルザック、ギュスターヴ・フローベールなど—の作品を読むことによって、観相学の知識を獲得していたのではないかと指摘する（Renner 228; 232）。Renner, "Red Hair, very red, close-curling: Sexual Hysteria, Physiognomical Bogeymen, and the 'Ghosts' in *The Turn of the Screw.*" を参照。
3. 「[19世紀後半では] 犯罪者や患者は何よりも異貌をもつものとしてイメージされ、逆に異貌をもつ者は犯罪者や患者ではないかと疑われかねないということである」（富山 228）という興味深い見解もある。
4. 山崎カヲルによれば、骨相学は、「19世紀においては、観相学と分かちがたく結びついてもいた。骨相学は脳の諸部分と精神の諸機能との対応を主張したが、それと同時に、頭蓋骨の形状によってどのような機能が発達あるいは未発達であるかを決定する理論としても流通したのであり、観相学が利用したのは、この後者の部分であった」（山崎 56）。

### Works Cited

- Balzac, Honoré de. "The Quest of the Absolute." 1834. *The Quest of the Absolute and Other Stories*. Trans. Ellen Marriage. Philadelphia: The Gebbie Publishing, 1899. 1-222.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man, Selection in Relation to Sex*. London: John Murray, 1871.
- Duchenne de Boulogne, G.-B. *The Mechanism of Human Facial Expression*. 1862. Trans. R. Andrew Cuthbertson. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Ellis, Havelock. *The Criminal*. New York: Charles Scribner's Sons, 1892.
- Galton, Francis. "Generic Images." *The Nineteenth Century* 6 (1879): 157-69.
- Hartley, Lucy. *Physiognomy and the Meaning of Expression in Nineteenth-Century Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

- James, Henry. *The American*. 1877. Ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978.
- . *The Portrait of a Lady*. 1881. Ed. Robert D. Bamberg. New York: Norton, 1975.
- . *The Turn of the Screw*. 1898. Ed. Robert Kimbrough. New York: Norton, 1966.
- . *The Wings of the Dove*. 1902. Ed. J. Donald Crowley and Richard A. Hocks. New York: Norton, 1978.
- . "To Mrs. Henry James, Sr." 13 October 1869. Letter of *The Letters of Henry James*. Ed. Percy Lubbock. New York: Scribner's, 1920. Rpt. in *The American*. Ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978. 321-22.
- . "To William James." 6 July 1874. Letter of *The Correspondence of William James*. Ed. Ignas K. Skrupskelis and Elizabeth M. Berkeley. Vol. 1. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1992. 238-41.
- . *William Wetmore Story and His Friends*. London: Tharnes and Hudson, 1903.
- James, William. Rev. of *The Skull and Brain*, by Nicholas Morgan. 1875. *Essays, Comments, and Reviews*. Cambridge: Harvard UP, 1987. 308-09.
- Lavater, John Caspar. *Essays on Physiognomy*. Trans. Thomas Holcroft. London: Ward, Lock & Co., 1789.
- Lombroso, Cesare. *Crime: Its Causes and Remedies*. Trans. Henry P. Horton. Boston: Little, Brown, and Company, 1918.
- . *Criminal Man*. 1876. New York: G. P. Putnam, 1911.
- Lombrso, Cesare and William Ferrero *The Female Offender*. New York: D. Appleton, 1895.
- Mitchell, Lee Clark. "A Marriage of Opposites: Oxymorons, Ethics, and James's *The American*." *The Henry James Review* 19 (1998): 1-16.
- Poirier, Richard. *The Comic Sense of Henry James: A Study of the Early Novels*. London: Chatto and Windus, 1960.
- Renner, Stanley. "'Red Hair, very red, close-curling': Sexual Hysteria, Physiognomical Bogeymen, and the 'Ghosts' in *The Turn of the Screw*." *The Turn of the Screw*. Ed. Peter G. Beidler. New York: St. Martin's, 1995. 223-41.
- Seltzer, Mark. "Physical Capital: *The American* and the Realist Body." *New Essays on The American*. Ed. Martha Banta. Cambridge: Cambridge UP, 1987. 131-67.
- Sizer, Nelson, and H. S. Drayton. *Heads and Faces, and How to Study Them; A Manual of Phrenology and Physiognomy*. New York: Fowler and Wells, 1886.
- Tichi, Cecelia. *Embodiment of a Nation: Human Form in American Places*. Cambridge: Harvard UP, 2001.
- Tytlar, Graeme. *Physiognomy in the European Novel: Faces and Fortunes*. Princeton: Princeton UP, 1982.

- Walters, Charles Thomas. "Sculpture and the Expressive Mechanism." Wrobel 180-204.
- Wrobel, Arthur. "Phrenology as Political Science." Wrobel 122-43.
- Wrobel, Arthur, ed. *Pseudo-Science and Society in 19th-Century America*. Lexington: UP of Kentucky, 1987.
- "The First Principle of Physiognomy." *The Cornhill Magazine* 4 Nov. 1861: 569-81.
- 多木浩二『眼の隱喻—視線の現象学』東京：青土社、1982年。
- 富山太佳夫「顔が崩れる（中）」、『現代思想』1991年7月号、60-80頁。
- 谷内田浩正「この顔を見よ—顔のカタログ化と退化のリプレゼンテイション」、『現代思想』1991年7月号、60-80頁。
- 山崎カヲル「退化の観相学」、『現代思想』1991年7月号、50-59頁。